

北九州市の文化財を守る会

会報

No.17 51. 12. 1

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区城内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389
印刷 博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2番2号
電話 511-1011

(1)

枝光八幡神社にある獅子頭面
黒田の老臣小川喜助の寄進せしものか
頭部から低辺まで五一種寄進者銘なし



(2)

求菩提山護国寺常住(什)物獅子頭面(雄)
寄進 大願主 山下坊 清尊上件者現当二世悉地也
祈念若断 永禄三年二月吉日頭部から下顎まで四七種



寄進と奉納

枝光八幡宮の獅子頭面

求菩提山修験文化致(重松敏夫著)有形民俗資料の木像
について、次の如く述べている。「ここでいう木像とは一
般的な庶民信仰、または求菩提信仰をみる上での像をさし
時代のな上下は勿論関係しない、つまり土俗的なものをさ
しているのである。したがって作品としてみるのではなく、
庶民の刻んだもの、山伏の刻んだもの、そうした立場か
ら、修験道文化の断面をみようとするもので、このような
意味からして一片の木像の破片も資料として、貴重な意味
をもつものであると説いている。」

写真(1)は木質朽蝕か虫蝕のためか、鼻の下何種かを鋸で
切断した形跡があつて、獅子面全体像が写真(2)とくらべて
似ていて違う、可成り見劣りがする。これが土俗的という
のであろうか。(筆者には鑑識がない)

今は枝光八幡神社というが、慶長以前は麻生領主の祀る
麻生八幡といわれ、八幡市史(四四二頁)に次の如く記し
ている。
○「按ずるに此社初めは宮田山にあり麻生氏の居城花尾
山の鬼門に当り鎮守の神として崇敬せらる。古木像。慶長
十二年黒田家の老臣小川喜助の寄進せりという獅子面」と
とあり、また戸畑市史(八頁)では、宮田山の八幡大菩薩
宮のいわれを説き、麻生氏没落後社殿は荒廃した。主君黒
田長政公も深く歎かれ、これが復興改修を思い立ち、二年
余を費やして完成した。その奉幣に主君の代使を三宅若狭
が勤め取り行ない、隨身二体を奉納した(以上は全文の概
略)、小川喜助の寄進は慶長十一年で、三宅若狭の奉納は
十二年である。

以上のことから考えると、宮田山の麻生八幡大菩薩宮の
神殿復興を黒田長政に進言したのは、獅子面を寄進した老
臣の小川喜助であるといえる。中島の城番三宅若狭は領域
内であることよつて主君の代使を勤め、隨身二体の背銘
に「三宅」と刻んで自己主張をしたのであろう。それはよ
いとして、小川喜助が復興祈願に獅子面を寄進して、宮田
山の八幡大菩薩の名を高からしめた宮田山も、今はその跡
を知る人さえない。只この面が、これが黒田の老臣ともあ
る小川喜助の寄進したものかと思つてみる。(柴田記)

編集だより

▽今年も残り少なくなりました。
「八幡東支部」担当の会報十七号
ができましたのでお手元にお届け
します。
▽当支部会員からも他支部よりも
原稿が集まりませんし、発行期日
も迫りましたので編集者の方で急
拠知人の方々に執筆を依頼しまし
た。
▽会員の皆さんの投稿をお願いい
たします。「パスによる文化財め
ぐり」の感想文もお寄せ下さい。
▽次回の担当は若松支部で発行は
昭和五十二年三月一日の予定で
す。

方でも相手が百姓であるから脅し
の発砲で空砲であったのであろ
う。一人も銃砲で打たれたとい
のを聞かなかった。だが我が枝光
軍の指揮者は直に提灯を消して全
員を伏せさせたのは、実に立派な
処置であった。中略

一揆軍は昨日までの勇気は何処
へやら、刀を二本差した武士が銃
砲を持った足軽を連れて監守する
ので逃げられもせず、震えながら
武士の命令に従うより外はなかつ
た。遠賀川より東の者は右岸に集
まれ、西の者は左岸にと言われ
命令のまま集った。そして夫々人
数を調べて各村の重立った者を一
人ずつ呼んで何か言い渡して、村
に帰って宜しいということにな
った。それがその日の三時頃であ
ったと思う。

茲に勇猛果敢の百姓一揆も二
夜三日を以て最後の幕となった。
村に引きあげる枝光組は黒崎で日
が暮れたので、例の高張提灯を灯
して道の明りとしたが、武士が所
々におつて一々唯何されたり訊問
されたりしたが、解散を命ぜられ
て帰村と言ふことが解り放免され
た。夜の十時頃無事帰村したが一
人の怪我人もなかったことは幸い
であった。

村の犠牲者となつて福岡に呼び出
されて尻を叩ききされて追放され
た。と結んでいる。
この一揆に就いては嘉穂郡誌に
江島茂免氏の竹槍日記として詳し
く書いてあるが、福岡県史からそ
の概要を述べてみる。
明治六年この地方稀なる早魁に
襲われ六月に入つても田植ができ
ず、そのため米価は日々騰貴し農
民の困苦は其の極に達した。それ
で筑前嘉麻郡高倉村の日吉神社に
二十七ヶ村の者が集り、雨乞いの
祈禱をしていた。六月十三日附近
の金国山の山頂で昼は紅白の旗を
掲げ、夜は烽火を焚く者のあるこ
とに気付き彼等は不審をいだい
た。これは米相場に關係する目取
りといわれる者を置いて相場を通
信する作業であることが解り、米
価の騰貴は彼等相場師のなせる業
と知り、目取りに会つてこれをや
めさせようと、十余人の者を使い
に出したが、目取達はそこにな
かったので、豊前の猪膝宿に筆海
という相撲取りが目取りの親分だ
であるといつたので、豊前(田川郡)
猪膝村の筆海に掛合に行つた。筆
海は小倉県の者で小倉県庁の許可
を得て居るので、筑前の者の
指図はうけぬといつて取り合はな
い。ついに両者乱斗となり、嘉麻
郡の農民を縛りあげた。この知ら
せをうけた筒野村の医者洲上啄章
は、我が子の佐一も捕われてい

ることを知り、憤激し、嘉麻郡二
十七ヶ村に書状を出し捕縛者奪回
を呼びかけたという。
その文面は「捕われた前後の事
を述べ容易ならざる大変なりとの
急報が来た。至急応援のため十五
才以上、六十才以下の者は一刻も
早く官籠りの場まで出頭せられた
い」と檄を飛ばした。これに応じ
て六月十六日の朝大挙して猪膝村
に押し寄せた。
大隈町の目明、石橋弥吉もこの
目取の一類であつたが、この紛擾
を聞き馳けつて双方の間に入つ
て調停した結果、親分の筆海も調
停を受け入れ、捕えていた者を離
しいうなれば仲直りで一杯やつて
帰村させた。ところが彼等は山路
を通つて帰つたので、大挙して押
寄せて来る村人とはスレ違いにな
つた問題はここから鹵軍は狂う。
猪膝村に着いた群勢を目明の弥
吉は諭して退散させようとした
が、群衆は筆海の家を壊し、其の
附近の民家にも乱入した。更に翌
十七日目明の石橋弥吉の家を襲つ
て、解散する気配もなく益々狂暴
となり、総勢は二手に分れ一手は
上穂波地方へ、一手は下嘉麻各村
の富豪を襲い飯塚の宿に入つて暴
れれば暴勢の範圍は急速に拡ま
り、筑前全国に波及してゆき六月
二十日には箱崎から博多へと進撃
して県庁へ乱入放火をはじめたの
で、県庁の守備兵は実弾を発砲

し、士族隊は抜刀して一揆軍に立
ち向つたため漸く擾乱はおさまつ
た。

筆海の家を壊して氣勢を挙げて
県庁襲撃まで五日間、筑前全土の
農民が何等かの形でこれに参加し
ている。其の数十万といわれ
る。今日の常識を以つても判断に
迷う、勢の強さ迅速さ、うねりの
大きさに驚く、彼の暴民も無意識
に判断なく豪商を襲つたものでは
ない。県史にもある如く、博多の
豪商八軒を襲つたが覆並屋は世に
聞えたる慈善家なれば災害を免れ
たりとある如く、衆目の認めるも
のはそれを侵してはいない。

長い封建政治の圧迫に埋れてい
た農民は、新政府になつて少しは
ましなことがあるかと期待してい
たにも関わらず、却つて農民は重
荷を背負われ、あまつさへ役人
である目明しが彼等一味に加わつ
て、米の相場で金儲けの片棒をか
ついでいると知つて、農民の不満
は一気に爆発した。その爆風は遠
賀川の川筋を走つた。枝光村の場
合、若し一揆に加担せぬならば、
他村から攻めて来て枝光村全体
を焼き打ちするという。我が村も
一揆に加わることにした。一家か
ら必ず一人出向くことにきめた。
若しこれを拒む者は其の人の家を
血祭りに焼きこぎぐという。村人
は皆慄えあがつてこれに参加した
というが、庄屋や役人の命令では

# 若松区江川沿岸の史跡と伝説地について

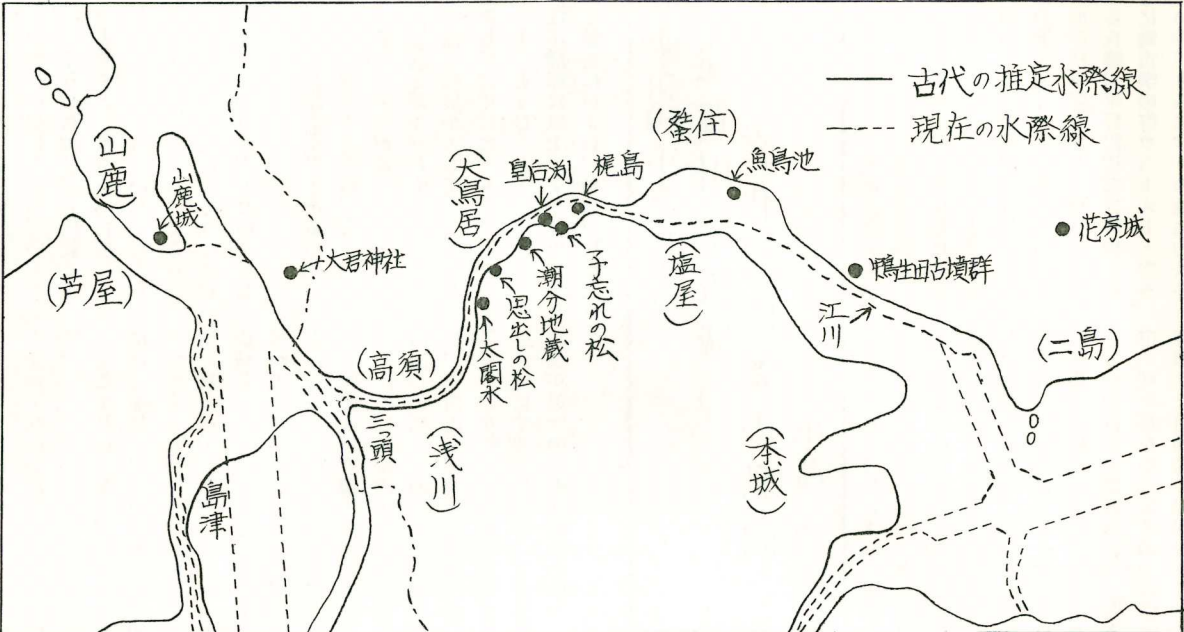
八幡西区 竹中岩夫

## 一、はじめに

若松区江川沿岸の歴史的意義については、昭和四十五年に発行した小著「北九州の古代を探る」の第二章古代北九州水道で考証した。これはこの地域の、古代海上交通史跡としての重要性を強調すると共に、その保全を願うてのことであったが、近年は多分に漏れず、ここにも土地開発の手が及んできた。そこで前記論考に若干手を加え、再びその意義を述べて史跡保全を訴えたい。

二、古代海上交通路  
言うまでもなく、古代には帝都と大宰府の間に「大路」と呼ばれる一級国道が設けられていたが、これが北九州市を通過したことはよく知られている。この陸路に並行して海上交通路が存在し、利用されていたことも万葉集その他の文献で明らかである。

この航路は、瀬戸内を通過して関門海峡を出たあと、北九州市の海岸を通過して博多湾に入り、ここから陸路に移って大宰府に向った。この航路は、瀬戸内を通過して関門海峡を出たあと、北九州市の海岸を通過して博多湾に入り、ここから陸路に移って大宰府に向った。この航路は、瀬戸内を通過して関門海峡を出たあと、北九州市の海岸を通過して博多湾に入り、ここから陸路に移って大宰府に向った。



深かったので、海峡とみられ、若松区および芦屋町大字山鹿は島と考えられていた。

日本書紀と同じ年に書かれた観世音寺領田園山林図には、これを「山鹿島」と書いているし、江戸時代の文献には「若松島」と書いたものがある。また、現在でも江川に面した蟹住一帯を「島郷」と呼ぶのは、その名残りである。

三、筑前国風土記と江川  
この内海航路については、和銅六年(七一三)、朝廷が各国に命じて書き上げさせた風土記のうちの一つという、筑前国風土記に次のように書かれている。

四、神功皇后説話と江川  
日本書紀の仲哀天皇の条に、岡県主の祖熊罴が、仲哀天皇の船隊を若松区北海岸回りで岡津に案内したあと、今度は神功皇后の船隊を洞海湾経由で案内したことに

五、島門の意義  
大王の遠の朝廷と蟻通ふ  
島門を見れば神代し念ほゆ  
万葉集卷三(三〇四)におさめられたこの歌には「柿本人麿が筑紫国に下る時、海路で作る」という注釈が付けられている。

喜式の諸国駅伝馬筑前国馬の項に駅名として見られるが、この駅家は遠賀町島津付近にあったと推定されることから、歌の島門もこの付近にあったとする説がある。

歌の「遠の朝廷」は、言うまでもなく大宰府のこと。「蟻通ふ」は「蟻が縦に列に並んで通るように」という形容詞で、陸路の場合には人が継続して通ることを意味するが、人麿は海路を通ったのだから、この場合は船が縦に列に並んで通ることを意味する。また「神代し念ほゆ」は「神代の物語が思い出される」ということで、この場合の「神代」はその土地に残る説話のこと。古事記が書いているように、神武東征の際天皇が、宇沙(大分県宇佐)から岡水門(遠賀川河口)に遷せられたことや、日本書紀に見える神功皇后の洞海湾通過の伝承が、これに当ると思われる。

この歌は注釈にもあるように、人麿が都から大宰府へ船で向った時に作ったのであるが、この時多くの同伴者があって、何隻かの船隊をなしていたと思われる。この船隊は神武天皇や神功皇后と同じように、若戸水道から洞海湾に入

六、梶島  
暁の夢に見えつつ梶島の  
石越す浪のしきてし念ほゆ  
この歌もまた万葉集(巻九 一七二九)におさめられている。作者の藤原宇合は、蘇我氏を倒して大化の改新に大功をたてた鎌足の孫で、式部卿・大宰帥などの要職を歴任した人。天平十二年(七四〇)、小倉北区の板櫃川で官軍と戦って敗れた広嗣は、この宇合の長男であるから、父子共に北九州とは浅からぬ縁があるわけだ。

七、江川と島門  
この江川を通過したわけだが、狭い水道では、船は縦に列に並んで通るほかはない。  
人麿はこの時先頭の船に乗っていたのだらう。ちょうど蟻が通るように、この狭い水道を列に並んで続く船隊を見たとき、ふと神武天皇、あるいは神功皇后が船隊を引きいてここを通過されたという説話が思い出され、その感慨がこの歌になったものと思われる。だから島門は、歌の内容から考えても、この江川と思われる。

八、島門の由来  
この島門を出て、すぐ着く津(港)を「島門津」と呼んだことから駅名島門が生まれ、島門津から転じて島津になったのであろう。

九、神功皇后伝説  
北九州には多数の神功皇后伝説があるが、私はこれを二つに分類している。  
その一つは「宇佐八幡系伝説」である。

北九州にはかつて、小倉庄・到津庄・篠崎庄・長野庄・貫庄など多くの宇佐八幡系庄園が存在した。そうした庄園の領家は、所領の守護神として八幡神を分祀したが、その神社からは、更に多くの分社が生れた。

こうした神社には、たいてい祭神である神功皇后に関する伝説があるが、その大半は神功皇后と関係づけて、神社創建の由来を述べたもの、神社の近くの地名の由来を説いたものなどである。

これは昔の神官たちが、神社の創立を古くみせ、あるいは社歴を飾ろうとして創作したものであるから、発生が庄園創設以前にさかのぼるとは考えられない。

もう一つは「古来から存在したとみられる伝説」である。  
記・紀には神功皇后に関する説話が多くみられるが、これは奈良時代ごろ、すでに神功皇后の事歴は伝説化していたことを物語っている。  
神功皇后については、これら官製史書の成立時に創作されたものとし、架空の人物として消滅しようとする動きもあるが、私はそのモデルともいえるべき人物の説話が現地に残り、これが取り上げられたものとみている。記・紀と同じ時期に現地を書き上げた筑前国風土記が、この説話を多くのせているのは、それを裏付けるものであろう。

したがって奈良時代当時、神功皇后が通過されたという洞海湾・江川沿岸には、多くの伝説地があったとみてよい。弘川に残る魚鳥池は、日本書紀にみられる「魚沼・鳥池」であろうし、小敷の若戸病院北東下段にあった「神功皇后が江川を通過された時御座船を止められた」と伝える皇后瀕の伝説や梶島伝説もその一つであったと思われる。

中でも梶島は、海路をとった都

からの旅行者が、必ず通るこの狭い水路の中央に孤立していたうえに、そうした神功皇后伝説もあつたとすると、都でも名物岩々としてよく知られていたと考えられる天平四年(七三二)ここを通った字合は、最初からそれを承知のうえでこの歌を作ったのではなからうか。

歌に「石越す浪の」とあるが、万葉集には磯のことを磯、または伊蘇と書いたものが多く、石と書いて「いそ」と読ませたものは少ないこれは、梶島が大石であることを意識して使用したとも受け取れる

七、むすび

江川沿岸は以上のような古代史跡や景観に恵まれ、かつ詩情を誘

昭和50年における  
遠賀川中流域の  
文化財問題の動向

直教文化財を守る会 牛島 英俊

筑豊地帯——旧筑前、豊前両国が境を接していた遠賀川流域は、北を響灘、他の三方を山地に囲まれた南北に長い地域である。とくにいわゆる古遠賀潟をなしていた中、下流域は、広い範囲にわたっての沖積平野であり、島状に点在する丘陵、平野縁辺の丘陵地とともに考古学の好フィールドとなっている。さらに、その地理的条件

により、縄文時代以来瀬戸内系の文化、豊前地方の文化、さらに福岡平野からの文化が重層的に流れ込んでおり、特徴ある文化を形成した地帯でもある。

これらの地帯のうち一部は今日北九州市に編入されているが、ここでは遠賀川中流域一帯、直方市、鞍手郡を中心にこの一年間の埋蔵文化財問題の動向をふりかえ

う土地柄でもあるが、今はここにも土地開発の手が及ぼうとしている。

そこで私の提案だが、今のうちに保護を加え、その意義を広く知ってもらうためにも、近年設置された高塔山—石峰山遊歩道を中世山城花房山(自動車道の建設で一部が破壊されたが、本丸遺構はほとんど残っている)へ引き、ここから鴨生田横穴群—魚島池—梶島—子忘れ松—皇后湖—潮分地蔵—思出しの松—太閤水—三つ頭と結び、芦屋町と提携して安徳天皇伝承地大君を経て、山鹿—芦屋史跡群と連絡する。「史跡、伝説地探訪遊歩道」の設置を望みたい。

つてみたい。

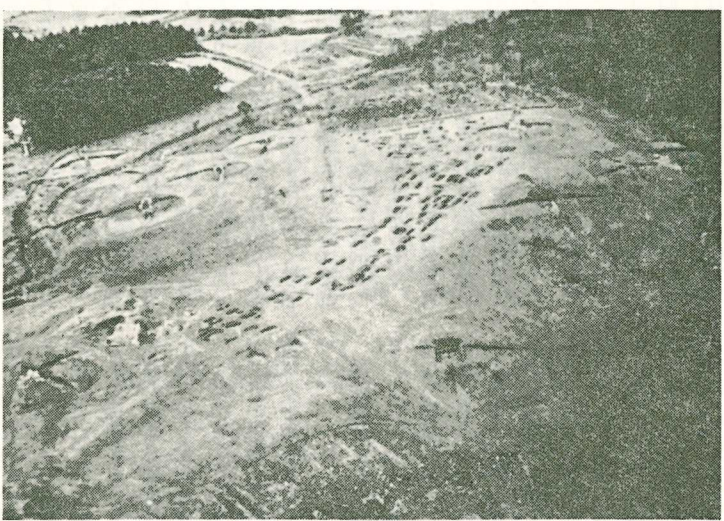
まず、一月十三日の朝日新聞によれば、国指定史跡竹原古墳(鞍手郡若宮町)のガラス密閉工事が完成したことが報じられている。同古墳は昭和三十一年の発見以来、その壁面の優美さから見学がたえなかったが、従来は入口のコンクリート建築と金網で仕切られていただけだったため見学者の出入りごとに壁面が外気に触れ、カビ発生の原因となっていた。今回の工事は前室入口に二重のガラス窓を取りつけ外気とし断し見学者はここから壁面を観察できるようになった。さらに従来のコンクリート建築の前にもう一部屋を新設し、密閉化をすすめている。ガラスによる密閉は、同古墳の他に福島県いわき市の中田横穴、泉崎横穴があるが、竹原古墳の場合、この密閉工事にもかかわらず玄室床面に白カビが依然発生しており、壁面の公開と保存両立の困難さが知られる。

1月15・20日(毎日)の報道では、飲塚市の宮脇前方後円墳の石室が同市旗忠公園内の立岩遺跡収蔵庫横に「移築」された。これは土地所有者から土地造成のため石室処置の申出があったためとあるが、埋蔵文化財は、本来その土地と不可分のものであり一度解体したものを「移築」してもそれが本来の意味での保存とはなり得ない

の歴史を知る会」が昨年発足したが、一年たった今日、地道ながらも着実な活動をつづけておられる。9月24・25日には直方青年会議所主催による「ふるさとの文化財展」が開かれた。これは前記縦貫道関係の発掘出土品をはじめ、直方、鞍手地方出土の埋蔵文化財の展示したものである。これには鞍手町在住の青柳宏氏が永年にわたって撮影された有形無形の文化財の写真も同時に展示された。

ものだったが、この時の感想文や絵は後日市内に展示された。9月4日には鞍手町において県教委による縦貫道関係の埋蔵文化財調査報告会がおこなわれた。同町の段の上遺跡、高木遺跡、向山遺跡、音丸城跡、中屋敷遺跡、後牟田遺跡の報告であったが、このたびも前述小冊子「くららのむかし」が配布された。これによって鞍手郡内の埋蔵文化財の調査はすべて終了した。また同町では発掘に参加した地元氏らによる「くら

る」文化財を考える集い」が開催された。講師として九州文化財保存協議会の久保山教善氏、パネラーに直教文化財を守る会(直方市)の寺崎直利氏、若宮町の小方良臣氏、若宮町を知る会の井手川泰子氏が出席され、現状の報告と将来への展望が討議された。その後参加者への質問用紙が配られ、これに基く質疑応答もなされた。この席で主張された「文化財の保護と活用は、たんにそのみで終わるのではなく、文化財をふくめた自然環境と不可分のものであり、両者の併存を考えてこそ文化財の今日的意義を見出しうる」との考え方は、ともすれば現代の生活にはやっかいものと考えがちな文化財の積極的意義をとらえる展望を示したものと考える。



鞍手郡若宮町夕井掛遺跡 丘陵の尾根には弥生時代後期の墓地群が、斜面には古墳が発見された (福岡県教育委員会発行「くららのむかし」その3より)

の所在はどこにあるのだろうか。まず第一にあげられるのは、行政の文化財に対する理解の低さである。この方面への予算は各市町ともゼロに近い。直方市は昭和47年に調査のあった感田横穴群(子持勾玉やⅡ様式の須恵器を出土した注目すべき遺跡)の報告書の予算を未だ計上できずにいるし、比較的文化財問題に熱心であり、保護案を制定している鞍手町ですら整然とした横穴式石室を持つ火尾古墳の破壊を黙認してはばからず、若宮町にいたっては破壊が迫った遺跡発見の報告を放置したままである。文化財の専従職員を最低1名は設けるべきであろう。また竹

ものである。石室の場合、それを築いた技術そのものを正しく伝えるのはそれ自身しかないのであって、「移築」されたものは単なる「遺構に似たもの」にすぎない。同市内には前方後円墳としては他に寺山古墳が発見されているのみであり、今回の行政による安易な「処理」が惜しまれる。2月25日(毎日)では、前述若宮町の「竹原古墳保存会」の紹介がなされている。同町では山陽新幹線九州縦貫道の建設による埋蔵文化財の大規模な破壊が続いているが、おくれればせながら、このような動きが出てきたことは喜ばれる。ただし、保存運動の資金作りのためとして町観光協会とのタイアップを考えられているのは賛同できない。竹原古墳の見学者が激増して壁面の風化、カビ発生が懸念されるに至った原因のひとつに、同町内の脇田温泉——今のところ、町内唯一の観光資源——からの壁面見物客の増加が数えられるからである。似た現象は朝倉郡原鶴温泉周辺でも起きていて聞くが、同会は文化財即観光資源という考えにおちいらぬ健全な活動へ向って頂きたいと思う。3月13日には県教委主催による「若宮町所在遺跡の調査報告会」がおこなわれた。これは昭和49年4月からおこなわれていた同町内の九州縦貫道予定地内の一連の遺跡発掘調査の報告であり、百人余りが参加した。調査、報告された

のは遠園遺跡、茶臼山城跡、小原遺跡、小原古墳群、夕井掛遺跡、柳ヶ谷遺跡である。これらは弥生時代後期および古墳時代後期、および中世のものである。とくに夕井掛遺跡からは木棺墓16基をはじめ、箱式石棺墓27基が出土した。これらの多くは埋葬遺構の上部に配石や置石をおこなっており注目された。当時の墓標として設置されていたと考えられている。報告会は多数のスライドを使用し、出土遺物の展示さらに小冊子「くららのむかし」が配布された。この小冊子は同教委が地元を対象としておこなった数回の説明会でその都度刊行されたものである。多忙な発掘の時間をさいて文化財への理解を喚起された姿勢は大いに評価されるべきであろう。図版、写真を豊富に使用した上質紙で仕上げたもので、粗略な概報などは顔向けの立派なものであった。しかし、受益者負担によるその資金の出所を考える時やはりこれは遺跡の死亡診断書にすぎぬのではないかという思いがするの筆者だけではない。5月には鞍手町の旭一古墳が県教委により調査された。この古墳はかつて銀製の冠を出土した銀冠塚古墳の西五〇〇米のところに位置する。径約十五米の複室の横穴式石室をもつものであるが、かつて盗掘され墳丘、石室ともに半壊状態であった。当初この古墳は調査後土砂採りによって消滅という今日ごく一般的な破壊のパターンである。最後に市民のサイトで言えば文化財を護ることこそ、こんにちの我々の生活を守ることだということ意識を広めることが必要といえよう。古墳や集落跡、寺院、城郭はそれがよって立つ自然環境と不可分のものである以上、これら祖先からの遺産を守ってゆくことこそ我々のくらしやすい環境、ひいては明日の文化をつちか根元と思うからである。

善光寺の馬塚  
八幡東区 西岡 昭

『筑前国統風土記』巻之二十四、内藤陣山の項に、麻生家信が花尾城に籠城した折、秘蔵の名馬を殺させた事が記されているが、『市史』にある『麻生物語』によると明応年間(AD一四九二—一五〇〇)家信は花尾城にあり、異腹の弟上総介は周防の大内氏の近習で、花尾城を自分のものにしようとする内氏にこれが種々働きかけをしたから、上総介は幼年より吾が近臣たり。近江守家信は常に述職もせず、速に花尾城を明け、其方に相渡すべく、命令すべしと仰の、突然家信に下知ありしかば、家信の答に、近頃以て大内館の御意とも存せず。強てとらば、城を枕の外なし」と、ここに内藤下野守を将とした三万余の大内勢との間に攻城戦が始まった。籠城三年に及ぶある日、家信は秘蔵の名馬が絆綱を切つて敵陣に走行しようとする有様を見て、ながい籠城に飽きて自分を見限ったかと激しく立腹し、走つて馬に追いつくや左手で尻毛を掴んで坂の途中から城

中へと引戻した。「畜生ながら憎むに余り早く殺せ」と家臣に命じて切殺してしまつた。すると不思議にも、すぐさま馬霊が近習の一人に托き、私は忠義を顕はさんと、主人に引かれ、城中に引込まれた。主人の力量を敵陣に見せんと思へばこそ、若し敵陣中に馳入らば、敵の大将士卒悉くけ殺し、勿殺し、喰ひ殺さんものと思ふ処、主人追掛け来給ふ故何事やらんと踏上り、城中に帰りしを、却て主人こそ吾れに不忠の名を負わせ剩へ切殺されしは怨ても尚ほ余りあり」と口走つた。家信はこれを聞いて、短慮にもこのような名馬を殺したのは大きな誤りであつたと、早く塚を築き神に祭れと、波多野満太夫をして、荒馬大明神と祭られたり。其後、麻生領内所々馬神を祭れり。祭日二月初午の日なり。其霊徳病馬を癒しめ、擁護神驗著しとぞぐと、馬塚の由来が述べられている。

『全附録』枝光村の項に、馬霊神、ミナミヤシキといふ。麻生氏名馬の霊を祭る。郷内七所に馬塚というあり。『全拾遺』には、馬霊神、北山、麻生氏が名馬の霊を祭ると云々とあつて、枝光の北山に麻生氏ゆかりの馬塚があつた事が判る。

むかし麻生氏の寺であつたと言へられる北山観音堂は『全拾遺』に、竹葉山善光寺といふ梵刹の

跡もあつた。五輪塔所々に残りあり、いぢょうの観音さんと呼んで親しまれた北山観音堂は、名物の大公孫樹もろとも、昭和二十年八月八日の八幡大空襲のさい、白川町一帯と運命を共にしてしまひ、様相は全く変わってしまったが、日の出町一丁目二の二六に真言宗の善光寺として生きかえつてゐる。

あらゆる印刷・出版

**博文堂印刷所**

北九州市小倉北区長浜町2番22号  
〒802 TEL (093) 511-1011

豊前の小倉から陸路で黒崎へ向う街達筋に深谷というところで一休みしたのである。深谷の茶屋として旧史料にもある。(今中央町の勤労会館の西から八幡郵便局の間、即ち中央町商店地域一帯を深谷という) 枝光の人達は、その街道並木を六本松といつて地名の如く呼んでゐる。そのころから東北にはいりこむ道は枝光村への村道で、枝光川の土堤伝いに川下へ下れば、枝光の中心部に会おう、枝光川は血倉の溪流が大谷に流れ深谷を通り、栗ヶ崎の裾あたりで枝光川といわれ、ゆるやかに洞海の入江に流れる。

この村道は明治三十四年郡道となつた。時の郡長の肝煎りで完成したので、郡長の名をとつて岡田町と名付けられた。枝光の人達は大きな道、即ち県道とか街道筋を往官といつた、その往官からはいの枝道は、今は製鉄所の構内となつたが、戦前まではその一部が岡田町という名で残つてゐた。

原田準吾という人が昭和十六年に書いた、我等の枝光というものなかに、百姓一揆と題して、老人達から聞いたことを、こまめに書いてゐる。確かな資料によつて書かれたものでなく、老人からの聞き書きをまとめたようであるが戦時態勢の最中か、表現にも気を付けたところがある。

当時の枝光の住人の有態を知ることができ、会話の中にも土語が使われていて面白い。尚一揆の事実を解り易くするため、末尾に他の資料を使って補足した。

幾多の流血数多の諸名士の命を犠牲として、始めて王政復古となり、遂に新政府はできたけれども明治初年頃は永い間の封建制度に習われて居つた。不平分子は其処此処に潜み居りて、異変あれかしと待ち構えて居る時である。事件は明治四年(明治六年の誤り)の事であるが、天道は世の中に幸いを与えぬ年であつたであろう。五月の田植時となつたけれども空梅雨で、雨が一つも降らぬので、田畑は真白く、かわいて離割れしてしまつて、百姓は只手をたらねて徒らに天を憐むのみであつた。でなくても気が焦々して居る矢先きに、流言蜚語は遠慮なく飛ぶのであつた。其の時分には元より新聞はなし、人の話が村から村へ響くのであつた。茲に枝光村に、広島から梅吉と云う大工が五十年前から来て、村の冷飯大工として、彼方に三日、此方に五日と、こつ働いて居つたが、人より高いところの上るかげんか、世の出来事を聞いて来るのが早かつた。何処から聞いたのか、今筑前の国中は大騒動、武士と百姓の大喧嘩が始まつたげな、今に武士がこの村にも攻めて来るぞ、皆の衆は早く竹の槍でも造つて置きなさいと、村中に吹聴してまわつたので、噂は噂を生み、隣の戸畑村にも大蔵村、尾倉村にも、この話で持切りとなつた。村の人々は仕事も手につかぬ、かかるところに更に又新しい話が生れてきた。上にたつ人達が百姓町人をもぐつて(ごまかして)、天子様のお所には年貢米が届いて居らぬげな、それで其処にも此処にも百姓一揆が起つて、藩旗を押し立てて、みんな竹槍を担げて福岡に向つて攻めて行きつた。すると、流言は生れ風聞は飛ぶ、然るに火の無き所には煙はたたぬと云う假令、流言は事実となつて現れた。誰言うとなく我が枝光村も一揆に加わつて福岡に向かへばならぬ。若し枝光村が加担せぬ様なれば他村から攻めて来て、枝光村を焼き打ちにするぞと云う交渉であつたので、我村も一揆に加

枝光の百姓一揆

八幡東区 柴田重利

わることにして一家から必ず一人出向くことにきめた。若しこれを拒む者があれば其の者の家を血祭りに焼きこきと云うので、村人は皆懼れ上つて我も吾もと竹槍を担いで広場に集まつた。

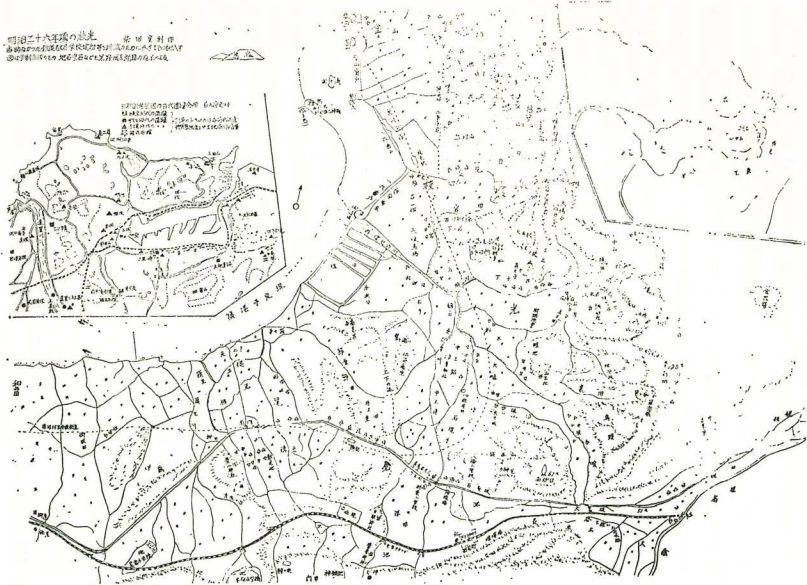
早や皆殺伐は気色となり、第一番に庄屋殿から先に焼き払へと薙きたつたので、村の老人達は驚いてこれを制し、一方庄屋の芳賀与八郎さん方へ馴けつけて、応急の所置を取つた。芳賀家からは早速酒やら握り飯などを出して皆の門出を構つた。それで老人達は芳賀家に集つて村を守ることにし、壮年青年は一家から一人宛繰り出して凡そ百人の同勢は「遠賀郡枝光村」と染め貫きたる旗を押し立て、ブー、ブーと洞貝を吹き鳴らして勇ましく村を出発した。

「此の騒動に庄屋殿の芳賀家は家宝、財宝をひそかに船に積んで彦島の福浦に運んでいったら」と云ふと「我が枝光一揆軍は西に向つて進軍し、尾倉村、前田村、黒崎村と通れば各村の軍勢が之れに加つて、五、六百人の人数となつた。陣の原まで来てと川向うの本城あたりの大きな家が盛んに燃えつつあるのを見た。その時分は陣の原から本城には渡舟で渡るのであつたが、何んか向うから鉄砲を打つてゐるといふので、危険を感じて渡らぬことにして川上の折尾まで昇り、折尾の一の橋を渡つて本城

の方を下つて来たが、最早日が暮れたので「遠賀郡枝光村」の高張提灯の元に集まつて、村人の迷わぬ様にし其の辺の空屋に泊つた。翌朝夷神塚に集つたが其の時の人

数は実に夥しい集りであつた。芦屋町には海路から沢山の武士が福岡から来て詰めかけてゐるので、芦屋の者は一人も出て来なかつた。否福岡藩士警戒で一人も出さ

明治26年頃の枝光の地図



なかつたのである。枝光村は自分の村から送つて来た炊き出しの握飯を喰うてから、勘七さんの音頭で前進し始めた。本城の本村に至り、大庄屋の佐藤家に近づいた時、向うから鉄砲を打つてゐるといふので皆此方の方に逃げて居つた。それで枝光軍も引き退つた。ところが笑止にもそれは竹藪に火が移つて竹がはしる音であつたので又ぞろぞろ皆が詰めかけた。誠に立派な「ケシ造り」の家であつた。佐藤家も一揆の者が十尺の藁把に幾つも幾つも火を付けて燃やしたので、遂に佐藤家は丸焼けになつた。それから大羅越へをして折尾に出で中間の大庄屋岡部家を襲つた。大きな倉の扇を開いた否、叩き破つて見れば米俵がぎっしり積んであつて、そこに沢山な帳面があつた。その帳面を掴み出して悉く種池の中に投げ込んでしまつた。流石にお百姓衆である米俵は全部担ぎ出して道に立派に積み上げた。大庄屋岡部家は全部叩き壊し、残りは梁位だけにしてしまつた。大黒柱の如きは大きな立派な檜柱であつたが、小さな処は三寸角位にめちやくちやにしてあつた。それから米倉であるが、これは殿様に納める年貢倉で、これを開いてみると中には家宝、財宝、道具が充満してゐたが、全部引きちらかし、破りちらかした。其の頃唐縮緬(モス)は実に珍らしい

物で、美しい赤い友禪模様の唐縮緬が十尺許りもあつたので、若い者はばかあつて二、三尺ずつ首に巻いていたが、上に立つ者が、これを取つた奴は竹槍で突き殺すぞと、八ヶ間敷く言われて皆捨ててしまつた。それから遠賀川を渡つて虫生津に行きかけたが、道を更へて浅木村に向つた。村に入ると一番に酒醸家の有吉家を襲つたところ、有吉家は予て準備してゐた。とみえ、早速沢山の酒樽の鏡を打ち抜き、又沢山の握飯と肴を出したので焼打の難をのがれた。更に新屋の有吉家に向つた。此方は番頭が気のききたる者がいなくなつたのか、或は吝嗇家であつたか、焼打ちされてしまつた。女子供の泣き叫ぶ声か耳朶に残つた。日が暮れたので田の中に陣を張つたが、川下の芦屋の方から沢山の烽火が見へだした。香月村の者は勇気が余つていざこれから芦屋へ夜打ちだつと云つて、向うから篝火の来ぬ前に山鹿へ行き山鹿の連中と語つて、武士船も何も焼き焦さげと云つてゐる。然るに向うから来た沢山の烽火は、福岡から来た警戒の武士達であつた。一揆の方に向つてバリバリ銃砲を打ちかけて進んで来たので、一揆軍は恰も蜘蛛の子を散らす如く逃げ散つてしまつた。枝光軍は急いで高張提灯を消して、みんな田溝に伏せると命じて動かなくなつた。警戒の武士の